

第1日 助動詞の要点 (1)

解答

- 1 ① に||完了・連用形 ② けり||過去・終止形
 ③ し||過去・連体形
 ② つる||完了・連体形 ② ぬ||完了・終止形
 ① たる||存続・連体形 ② り||存続・終止形
 ④ ぬ||強意・終止形 ② て||強意・未然形
 ① ① こしらえさせなされたところ
 ② 専門の道に通じている者は
 ③ 近ごろまで残っていたけれども
 ④ 正門は焼けてしまった。
 ⑤ その形見として残っている。
 ⑥ 風もきっと吹くにちがいない
 ⑦ 船に乗ろうとする。

解説

1 本書の姉妹編『古文初級用』では、助動詞・助詞はどう口語訳したらよいか、ということを一に考えて、それらを表現の型の観点からまとめました。

この中級用の基礎編でももう一度、意味やはたらきを中心に主な助動詞・助詞をまとめていきます。

まず、古文では「時」を示す助動詞が重要で、現代語よりも数が多いですから、それらをきちんと理解することから始めましょう。

過去・完了のグループには六つの助動詞がありますが、基本的な意味は次のように分担していました。

2

- (1) さて、宇治の里人を召してこしらへさせられ
 ければ……思ふやうにめぐりて、水をくみ入る
 ことめでたかりけり。よろづにその道を知らる
 者は、やんごとなきものなり。

そこで(今度は)宇治の里人をお呼びになって、こしらえさせなされたところ……(水車が)望みどおりにうまく回って、水を汲み入れることがみごとであった。何事につけても、専門の道に通じている者は、貴重な存在である。

- (2) 大門・金堂など近くまでありしかど、正和のころ
 南門は焼けぬ。金堂はそののち倒れふしたる
 井井にて、とりたつるわざもなし。無量寿院ばかり
 ぞ、その形とて残りたる。

正門や本堂などは、近ごろまで残っていたけれども、正和のころ、正門は焼けてしまった。本堂はその後倒れ伏したままで、再建することもない。(その一部の)無量寿院だけが、その(法成寺の)形見として残っている。

- (3) かち取りものあはれもしらば……はやへ往むむ
 とて、潮満ちぬ。風も吹きぬへと騒げ
 ば、舟に乗りなむとす。

船頭はものの情愛もわからないで、……早く行くこととして、「潮が満ちてしまった。風もきっと吹くにちがいない」とあわただしく動きまわるので、(しかたなく)船に乗ろうとする。

き・けり || 過去 (……た)

つ・ぬ || 完了 (……てしまふ ……てしまった)

たり・り || 存続 (……ている ……ていた)

ですから、まずは基本の意味に当てはめてみるのが肝心です。

傍線部分訳は、普段から助動詞・助詞をできるだけ厳密に訳すように心がけましょう。助動詞が二つ・三つと重なって用いられた場合は特に注意して、最初は多少不自然になっても一語一語忠実に訳す練習をした方がよいと思います。

たとえば、⑥「風も吹きぬべし」は、「風吹くべし」(風が吹くに違いない。)との違いが分かるような訳ができれば減点ですね。

品詞分解・口語訳

- 1 ① その人ほどなく失せにけり、と聞きはべりし。

その人はその後ほどなくこの世を去ったと耳にしました。

- ② 年ごろ思ひつること、果たしはべりぬ。

長年念願していたことを、とうとう果たしてきました。

- ③ 天人の中に持たせたる箱あり。天の羽衣入れり。

天人の中(のひとり)に持たせている箱がある。天の羽衣が入っている。

- ④ 「風吹きぬべし。御船返しむ。」

「風もきっと吹くにちがいない。お船を返そう。」